第６回 ＺＡＯＤ ｉｎ ＡＫＩＢＡ ２０１５ 出展記念小冊子

～はじめに～

タオエン

「この小冊子をお手に取ってくださり、ありがとうございます。私は流遠亜沙（るとお・あさ）が管理しているホームページ、『局地戦用強襲型機動兵器・改』の看板娘を務めております、タオエンと申します」

ツバキ

「同じく、看板娘のツバキと申します。本誌では、私達が展示物に関する簡単な解説などを行わせていただきます。短い時間ではありますが、お付き合いいただけると嬉しいです」

～ヤミヒメ 仮想ドラグーン形態～

ヤミヒメ 本体

タオエン
「まずは、この展示会が初お披露目となる『ヤミヒメ 仮想ドラグーン形態』です。これは流遠亜沙が趣味で書いている小説作品、『漆黒の狂襲姫』に登場する主人公機〈ヤミヒメ〉――その特殊形態という設定です」

ツバキ
「ご覧の通り、ベースは〈コマンドウルフ〉で、本体の外見上の差異はカラーリングのみとなります。〈ヤミヒメ〉は特殊なゾイドで、通常時はあくまで“コマンドウルフとしては強力な個体”程度の性能ですが、この形態になる事で、一時的に本来の能力を発揮する事が可能となります」

タオエン
「その際、『E.I.リアクター』と呼ばれるシステムが構築され、それによって制御される『E.I.ウェポン』という特殊武装で戦闘を行います」

ツバキ
「頭上に浮いている端末はブースターで、攻撃・防御の際に、E.I.ウェポンの効果を増幅する役目を持っています」

タオエン
「仮想ドラグーンのパーツを外すと、首の飾り以外はノーマル機と同様です」

ツバキ
「製作者の“コマンドウルフとデザインを変えたくない”という想いもあるそうです。全ゾイド中、コマンドウルフが１番好きな機体という事で」

～ヤミヒメ弐型～

タオエン
「こちらの『ヤミヒメ弐型』は、第４回の『ZAOD』にも展示したもので、今回は武器を保持するためのアームを新造したver.1.5 となります」

ツバキ
「名前に“弐型”とあるように、ヤミヒメの強化型という設定です。ご覧いただければ判る通り、こちらはコトブキヤのHMM キットを使用しています」

タオエン
「ロボットアニメで言うところの“新主人公機”ですね。物語の進行に合わせて登場する予定で製作したものですが、その前に作品が凍結されてしまい、劇中には未登場となっています」

ツバキ
「ちなみに、３枚目の画像でくわえているツイン・レーザー・ブレード『クロヤシャ』と、会場でくわえているであろう黒い剣『ヤタガラス』は、この展示会にも参加されている紙白さんに製作していただいたものです」

タオエン
「許可を戴き、今回も展示させていただける運びとなりました。この場を借りて、改めて感謝の言葉を言葉を送らせてもらいたいと思います」

ツバキ
「紙白さん、ありがとうございます。今回の展示では久々の新作ゾイドも展示されているはずなので、是非、じっくりとご鑑賞ください」

～小説～

タオエン
「ここからはヤミヒメが登場する小説、『漆黒の狂襲姫』についても解説させていただきます。これは流遠亜沙が趣味で書いたものをホームページで公開していた、いわゆるオリジナルのバトストです」

ツバキ
「本編は一応の完結を迎えたのですが、過去編である『宵闇の凶終姫』の連載中にサイトを閉鎖したため、未完となりました。現在は新サイトを立ち上げていますが、旧サイト時代の作品は、一部の加筆修正版を除き凍結中です」

タオエン
「会場で展示されているポップのキャラクターは、それらに登場するゾイドを擬人化したもので、劇中にも登場します」

ツバキ
「彼女等は『仮想人格』と呼ばれる存在です。搭乗者とコミュニケーションを取るための対人インターフェイスで、ゾイドの記憶装置内にあるデータ的な余剰スペースである『空き領域』でのみ、この姿で搭乗者と対話が可能となります」

タオエン
「左のヤミヒメは名前の通り、コマンドウルフであるヤミヒメの仮想人格です。右のベアトリーチェは過去編である『宵闇の凶終姫』に登場する、主人公の初めてのゾイドとなるヘルキャット・ベアトリーチェの仮想人格です」

ツバキ
「隣のスペースで展示されている『ベアトリーチェ』がそれで、enigma9641 さんが製作してくださいました。この場を借りて御礼申し上げます」

タオエン
「彼女等は現在、私達と同じ看板娘としてホームページで活躍しています。それでは、駆け足ではありましたが、ここまでのお相手はタオエンと――」

ツバキ
「ツバキでした。ここからは特別編の短編小説をお送り致します」

漆黒の狂襲姫・特別篇

『姉妹のように』

〈大戦〉。

そう呼ばれた、現時点で最後の戦争が終結して、半世紀が過ぎていた。列強と呼べるほどの国家は存在せず、世界は概ね、平和な時代を迎えていた。

だが、それで争いがなくなるはずもなく、惑星Ｚｉからゾイドが不要とされる事もなかった。

ヒトとゾイド。

その蜜月は今日においても続いていた。

ヒトはゾイドを求め、ゾイドもまたヒトに応えた。

どれだけ時代が流れても、どれだけ争いを繰り返そうと、惑星Ｚｉの在り方は変わらない。

ヒトもゾイドも、変わらない生き物だから。

変わらず。

変われず。

それを善しとしてしまうのもまた――生物の業なのだろう。

姉妹のように

そこは限りなく『和』を意識した空間だった。

床には『タタミ』が敷かれ、空間は『ショウジ』で仕切られ、室内は『アンドン』の灯りが照らしている。中心には暖房器具の『コタツ』が置かれ、部屋の主が余程の好事家である事が窺える。

「――――」

その主は、見た目通りなら二十歳手前くらいに見える少女だった。黒い着物に身を包み、姿勢の良い正座でコタツに入り、瞑想するように瞼を閉じている。その姿は凛として美しく、ある種の絵画のようにすら見える。

少女の名前はヤミヒメ。

頭頂部に生えているオオカミを思わせる耳が示す通り、彼女は人間ではない。その実体は〈コマンドウルフ〉であり、この姿は仮初にすぎない。

ゾイドの記憶装置には『空き領域』と呼ばれるデータ的な余剰スペースがあり、そこに展開される仮想空間〈想刻の間〉で搭乗者とコミュニケーションを取るための対人インターフェイス――それが今のヤミヒメの姿なのである。

――こんこん。

控えめにショウジを叩く音がした。ノックだろう。

ヤミヒメが瞼を開くと、吊り目がちな琥珀のような橙色の瞳が露になる。ポニーテールにした艶やかな長い黒髪が、顔の動きに合わせて揺れる。

「――入れ」

ヤミヒメが言うと、ショウジが外側から開かれ、入室の許可を得た相手の姿が見える。

少女だ。

ヤミヒメよりはだいぶ幼く、見た目通りなら十二、三歳といったところだろう。白いシャツとオレンジ色のキャミソールという、ヤミヒメの和服と比べれば一般的な少女の服装だ。身に纏う雰囲気も、見た目に相応しい天真爛漫さを感じさせる。

少女の名前はベアトリーチェ。

頭頂部にはネコを思わせる耳があり、腰の下からは同じくネコを思わせる尻尾が生えている。

彼女もまた、ヤミヒメと同様の存在だ。

その実体は〈ヘルキャット〉だったが、ベアトリーチェの場合、ヤミヒメより複雑な事情を抱えていた。

「わあ！　コタツ出したんだ」

「冬だからな。良い時期だろう」

「お邪魔しまーす」

「……なぜ隣に入る。広い場所が空いておるだろう」
自分の隣に並んでコタツに入ったベアトリーチェに、ヤミヒメが怪訝そうな表情を向ける。確かに、それなりに大きいとはいえ、四角形のコタツであれば、誰も入っていない残り三ヶ所のどれかに陣取るのが普通だろう。
「並びたい気分だったから。駄目？」
「駄目ではないが、ベタベタされるのは好きではない」
「えー。ヤミヒメ、つれなーい」
「だから、ベタベタするなと言うに……」
身を擦り寄せるベアトリーチェに対し、ヤミヒメは口では迷惑そうな事を言うが、その口調に嫌悪のようなものは感じられない。それが判っているのだろう。ベアトリーチェは黄玉のような黄色の瞳を細め、茶色のショートヘアを揺らし、こてんとヤミヒメの肩に寄りかかった。
「――ありがとうね」
不意にベアトリーチェの口から漏れた言葉に、ヤミヒメが再度、怪訝な表情を向ける。
「なんだ、唐突に」
「わたしがこうしていられるのは、ヤミヒメのおかげだから」
「……」

「ヤミヒメが受け入れてくれたから、今でもアサトと一緒にいられる。アサトの役に立てる。それが、すごく嬉しいんだ。だから……ありがとうね」
ベアトリーチェにはゾイドコアがない。すでに失ってしまった。機体は失っても、ゾイドコアを新たな機体に移せばいい。だが、ゾイドコアはそうはいかない。失ったゾイドコアを復元する術はない。
現在のベアトリーチェは、ゾイドコアの欠片でしかなく、ヤミヒメの本体の中でかろうじて存在を保っている。
ベアトリーチェが言っているのは、そういう事だ。
「お前の能力が使えると判断したからだ」
「それだけ？」
他意はない――そんな態度のヤミヒメに、ベアトリーチェは満面の笑みを向け、上目遣いで見上げる。
見透かされている。
ベアトリーチェに対し、今更、取り繕っても仕方ない。
「……アサトが悲しむような事はしたくない」
これが本音だ。
ヤミヒメの搭乗者であるアサト・タチバナ。彼の初めてのゾイドがベアトリーチェだった。正直に言えば、ヤミヒメはベアトリーチ

ェがどうなろうと知った事ではない。だが、それでアサトが悲しむのであれば、善しとしない。
それがヤミヒメの基本姿勢だ。
「それでもいいよ。わたしも同じだから」
彼女等はヒトではない。ゾイドだ。
どんなにヒトのように振る舞っても、それは真似事にすぎない。
しょせんは模倣だ。
決定的なところでヒトとゾイドは違う。
「でもね。せっかく同じヒトを好きになったんだもん。仲良くなれた方が素敵だと思うんだ」
「ヒトの倫理観で言えば、それを『恋敵』と呼ぶのではないか？」
ベアトリーチェの言葉に、ヤミヒメが異を唱える。
「そうかもしれないけど――でも、わたし達はゾイドだよ？　ヒトの倫理観に縛られる必要はないと思うんだ。わたしとヤミヒメ、一緒に好きでいてもいいじゃない。アサトは二人のマスターなんだから」
「そういうものか？」
「そう思うよ」
ヒトとゾイドは決定的なところで違う。
だが、違っている事は悪い事ではない。ヒトの正しさが、必ずしも正解とは限らないのだから。
「ふむ、心得た」

そう言うと、ヤミヒメはベアトリーチェの頭に手を載せ、優しく撫でた。姉が妹にするように。
「えへへ。姉妹って、こういう感じなのかな？」
ベアトリーチェはくすぐったそうに笑うと、またヤミヒメの肩に寄り掛かった。
「判らんが、そうなのではないか？」
「そっか。じゃあ、ヤミヒメがお姉ちゃんだね」
「……」
「どうしたの？」
「いや、不思議な響きだと思ってな」
何か既視感を覚える言葉だったが、説明出来る気もしなかったため、口にはしなかった。
「お姉ちゃん♪」
「だから、あまりベタベタするな」
「もしかして、照れてる？」
「……照れてなどおらん」
からかうような口調のベアトリーチェに、ヤミヒメは少しだけ困ったような顔をした。

姉妹のように〈了〉

あとがき

初めまして、流遠亜沙（るとお・あさ）と申します。
ここまでご覧いただき、ありがとうございます。

『ASSAULT-SYSTEM』としては初の同人誌となる本誌は、いかがでしたでしょうか？　少しでも興味を持っていただければ、これに優る喜びはありません。
この手のイベントに参加するのも久々で、この１ヶ月間は準備に忙殺されながらも、イベント前特有の不思議な緊張感と充実感がありました。

1999 年の復活以降、『ゾイド』を取り巻く状況は変化を繰り返しつつ、今日までコンテンツとして続いてきました。根強い支持を受け続け、高いポテンシャルを秘めた作品なので、復活時のような勢いを取り戻し、やがては『ガンダム』や『マクロス』などと肩を並べるコンテンツになる事を望んでやみません。
今回の展示会が、その一助になるといいですね。

なお、ホームページでも色々とやっていますので、よろしければアクセスしていただけると嬉しいです。サイト名は『局地戦用強襲型機動兵器・改』です。
それでは、ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

ZOIDS ON !

本書の一部または全部を無断転載
する事を禁止します。
わたしからのお願いだよ。

by ベアトリーチェ

おくづけ
発　行　ASSAULT-SYSTEM
発行者　流遠 亜沙
発行日　2015/11/7
第６回 ZAOD in AKIBA 2015
Ｈ　Ｐ　http://assault.xxxxxxxx.jp
連　絡　assault2014@gmail.com